紀　　要

第 20 号

2007. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

平安時代前期における延暦寺の開発について

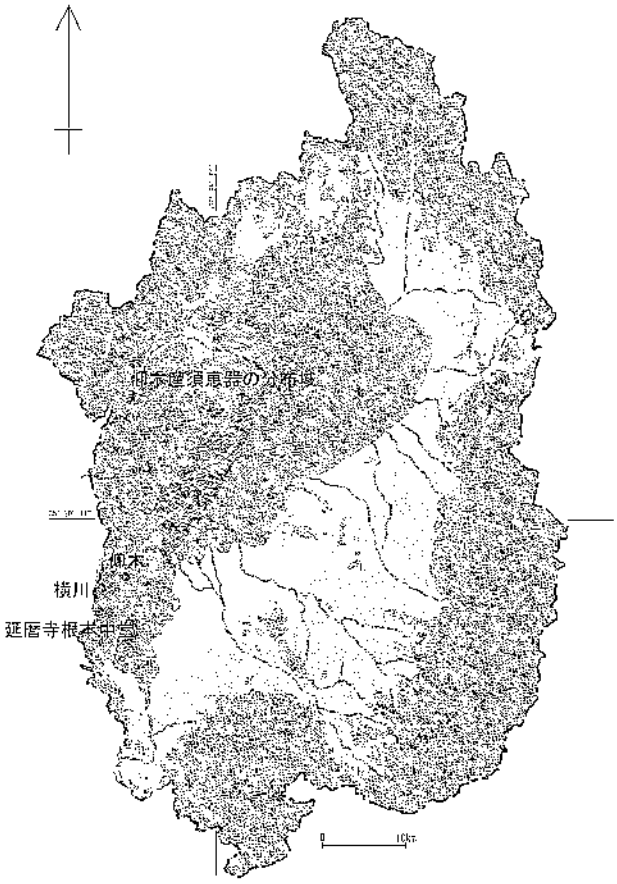
畑　中　英　二

1．はじめに―問題の所在―

一般論として、古代における寺院経営がいかなるものであったのかについて、詳細な具体像を考古資料から推し量ることは困難である。ただし、周辺地域の開発と関わっている場合、その輪郭をつかむことは不可能ではない。ここでは、滋賀県大津市・京都府京都市に位置する延暦寺における平安時代前期の土器様相とみるとともに、主たる供給元である仰木の窯跡群（天神川古窯址群）との関わりについて検討を試みる。

2．平安時代前期の延暦寺

最澄は弘仁13（822）年２月14日、僧としての最高位である伝教大法師位を授けられた。しかし、その４ヶ月後、６月４日に比叡山中道院にて大乗戒の独立を渇望しつつ入寂した。右大臣藤原冬嗣らが「山修山学の表」を天皇に表請し、大乗戒と天台僧育成の制度は、最澄入寂後７日に許された。翌14年２月26日、桓武天皇の建てられた天台法華宗であることを考え、桓武天皇の年号である延暦をとって比叡山寺を延暦寺と改称された。



第１図　遺跡の位置

弘仁９（818）年４月21日付『六所造宝塔願文』によれば、仏法を住持し国家を鎮護するために法華経一千部八千巻を安置する宝塔を安東（上野宝塔院＝浄法寺）、安南（豊前宝塔院＝宇佐神宮）、安西（筑前宝塔院＝竈門神社）、安北（下野宝塔院＝大慈寺）、安中（山城宝塔院＝比叡山西塔）、安総（近江宝塔院＝比叡山東塔）に建立するとしたが、最澄在世中に完成したのは安東と安北のみであり、全てが揃うのは約100年後であった。六所宝塔の中心に比叡山を置くという構想に加え、九院（一乗止観院・法華総持院・戒壇院・西塔院・浄土院・定心院・四王院・八部院・山王院）および十六院の建立を表明して天台宗の完全独立を目論んだのである。ただし、比叡山内での堂舎の造営は捗らなかった。９世紀代に限ると、主要な堂舎の大半は最澄入寂後に建てられたことが判る。以下に延暦寺での堂舎の造営の明らかなものについて９世紀代までに限って列記しておこう。

・延暦７(785)年　一乗止観院創建、経蔵造立（『叡山大師伝』）
・延暦９(788)年　比叡山八部院創立（『叡岳要記』）
・延暦12(793)年　比叡山文殊堂供養（『叡岳要記』）
・延暦13(794)年　一乗止観院落慶法要（『叡山大師伝』）
・弘仁３(812)年　法華三昧堂を造立（『叡山大師伝』）
・弘仁９(818)年　六所宝塔および山中の伽藍建立の構想を表す（『叡岳要記』）
・弘仁11(820)年　相輪樓を建立（『叡岳要記』）
・弘仁12(821)年　比叡山東塔（多宝塔）創建（『叡岳要記』）
・弘仁13(822)年　比叡山中道院にて最澄入寂（『叡山大師伝』）
・天長元(824)年　大講堂落慶法要（『叡岳要記』）
・天長２(825)年　延暦寺西塔に法華堂建立（『山門堂舎記』）
・天長４(827)年　大乗戒壇院建立（『叡岳要記』）
・天長10(833)年　円仁、横川に蟄居（『叡岳要記』）
・承和元(834)年　西塔に釈迦堂建立（『天台座主記』）
・承和14(847)年　円仁、東塔前唐院に住まう
・嘉祥元(848)年　横川首楞厳院（横川中堂）創建（『山門堂舎記』）
・仁寿元(851)年　常行三昧堂建立（『山門堂舎記』）
・仁寿４(854)年　法華総持院建立始まる（『山門堂舎記』）
・貞観３(861)年　文殊楼建立（『慈覚大師伝』）
・貞観７(865)年　無動寺明王堂建立（『天台南山無動寺建立和尚伝』）

・寛平5(893)年　西塔に常行三昧堂建立（『三宝絵詞』）

3．延暦寺大講堂西側整地層出土土器群の概要

延暦寺においては、堂宇の建て替えや防災関係などで数次の発掘調査が実施されている。調査は全域において満遍なく行われているものの、調査規模が小さいことから、考古資料のみで遺構の全体像を推し量ることは困難である。最澄によって開山された延暦寺の草創期にあたる遺構や遺物は確認されていないのが現状で、9世紀中頃を上限とする遺物が散見されているに留まる。

現時点において延暦寺関係で出土している土器群の内、最も古いものが、大講堂西側整地層である。この土器群は、9世紀後半を中心とする時期のものでさほど時期幅のないものとしてとらえることが出来る。そこで、これらの土器群をみることにより、組成と産地の在り方から延暦寺を巡る生産と流通についての検討を試みることとしたい。

（1）出土地点について

図示するように、現在の延暦寺大講堂の周囲に巡らされた調査区の中で、西側に位置するＴ１とＴ４において整地層が確認され、そこから一定量の土器が出土している（図2）。現在の大講堂の位置する平坦部と、より西側に位置する現在の開山堂との間には谷状の落ち込みがあったようで、それを埋め立てることによって平坦面を広げていることがわかる。

逆説的に言うと、これらの土器群が用いられていた遺構もしくは本来廃棄された遺構は整地作業によって破壊されたと考えることができる。度重なる造成によって、平安時代前期に遡る遺構は破壊されている可能性を考慮しなければならないだろう。

（2）出土土器群について

〔組成と産地〕

ここで出土した土器は、須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器からなり、僅かではあるが瓦も出土している。

〔供膳形態〕

供膳形態の中では、須恵器が重量・破片点数ともに半数弱を占め、灰釉陶器が3割前後、緑釉陶器が1割強、土師器はほとんど出土していない。組成からみると、土師器の量が著しく少ないことに特異性がある。この点については、発掘調査報告書においても既に指摘されている（延暦寺1990）。

須恵器の供膳形態は、蓋（1）・杯B（2，3）・碗（4）・皿A（6，7）・皿B（5）がみられる。蓋・杯は底部外面にヘラ切り痕がみられるが、碗は糸切り痕がみられる。須恵器の中には平安京近郊に顕著にみられる平安京近郊窯産の緑釉陶器素地（11）が散見される。なお、出土した蓋の内2点に、天井部内面に墨痕がみられる。

土師器は、暗文系杯（13）・所謂回転台土師器杯（14）・高杯（12）がみられる。

緑釉陶器には碗（16～18）・耳皿（19）、灰釉陶器は碗（20，21）・三足盤（22）がみられる。

〔貯蔵形態〕

貯蔵形態に中では須恵器が重量・破片点数ともに8割以上を占め、灰釉陶器が1割強、緑釉陶器が僅かにみられる。

須恵器の貯蔵形態は、瓶類（8～10）がみられ、灰釉陶器には瓶類、緑釉陶器には陰刻花文の施された手付瓶がみられる。

〔煮炊形態〕

煮炊形態は土師器のみで占められる。出土量が少ないことから、金属製の煮炊具を用いていた可能性を想定する必要があるかもしれない。

土師器の煮炊形態には、甕（15）がみられる。

〔産地〕

須恵器については、大半（8割前後）が山麓の仰木産であると考えられる。土師器については産地の詳細は明らかではないが、近江産であると考えられる。緑釉陶器は平安京近郊産、灰釉陶器は尾張産であると考えられる。

〔組成と産地〕

ここでみられる土器組成および産地は、土師器の量が著しく少ないことに問題はあるが、延暦寺の東側にあたる近江湖西地域において一般的にみられるもので、西側にあたる平安京での様相とは大きく異なる。

須恵器の量が著しく多いのは、生産地が近接していることによる可能性が高いと考えておきたい。

〔年代観〕

結論的に言うと、整地層からまとまって出土しているものの、若干の時間幅を持つものであり、9世紀半ばを中心とする一群（1～3，6，7，11，13，14，17，18，20）と9世紀後葉から10世紀にかけての一群（4，5，16，19，21，22）がみられる。

〔延暦寺大講堂西側整地層出土土器群の位置づけ〕

現在の延暦寺大講堂西側の整地層から出土した土器群は、9世紀半ばから10世紀にかかるもので占められることが明らかとなった。

つまり、その頃に、当該地点周辺に何らかの営みがあり、10世紀以降に現在の大講堂の位置する平坦部と、より西側に位置する開山堂との間にある谷状の落ち込み埋めるために土器を包含する土を用いたということになろう。

そこで見られる土器群は、延暦寺の西側の平安京ではなく、東側の近江の組成であることがわかる。9世紀代においてまとまった資料が見られるのは本事例のみであることから、当該期の土器様相が全て明らかとなったわけではないが、散見される資料を見る限りでは、平安京からの供給はほとんど見られないのが現状である。このことから、9

世紀代、つまり平安時代前期における延暦寺は近江側を基盤に物資（ここでは土器類）が供給されていた可能性を想定しておこう。

一方、10世紀代の居士林研修道場周辺第10層をみてみると、仰木産の須恵器でもなく、土器群の大半を占める所謂回転台土師器でもなく、（図３　１，２，４～６）の土師器皿に顕著に見られるように、一変して平安京的な組成へと変容していることがわかる。以降も、平安京的な組成が続くことから、９世紀代のみにみられる様相であったと考えることができる。

４．天神川流域における生産遺跡群の動向

〔天神川流域における生産遺跡群の動向〕

前稿（畑中2006）において述べたように、天神川流域においては、下仰木天神山遺跡庄田支群（７世紀前半代）、下仰木天神山遺跡南庄支群（８世紀後半代）、仰木遺跡第１地点（９世紀中葉）、上仰木遺跡（９世紀後葉）、仰木遺跡第２地点（９世紀後葉から10世紀）といった須恵器窯跡が確認されている。

天神川を遡るように須恵器窯が設けられていく様子を看て取ることができる。中でも下仰木の一群は琵琶湖に面する段丘・丘陵上に位置し、仰木の一群は比叡山東麓に位置し、立地が異なる点に特徴がある。

これらの他に、上仰木遺跡で製鉄や銅の鋳造が行われている。

〔天神川古窯址群産須恵器の分布圏について〕

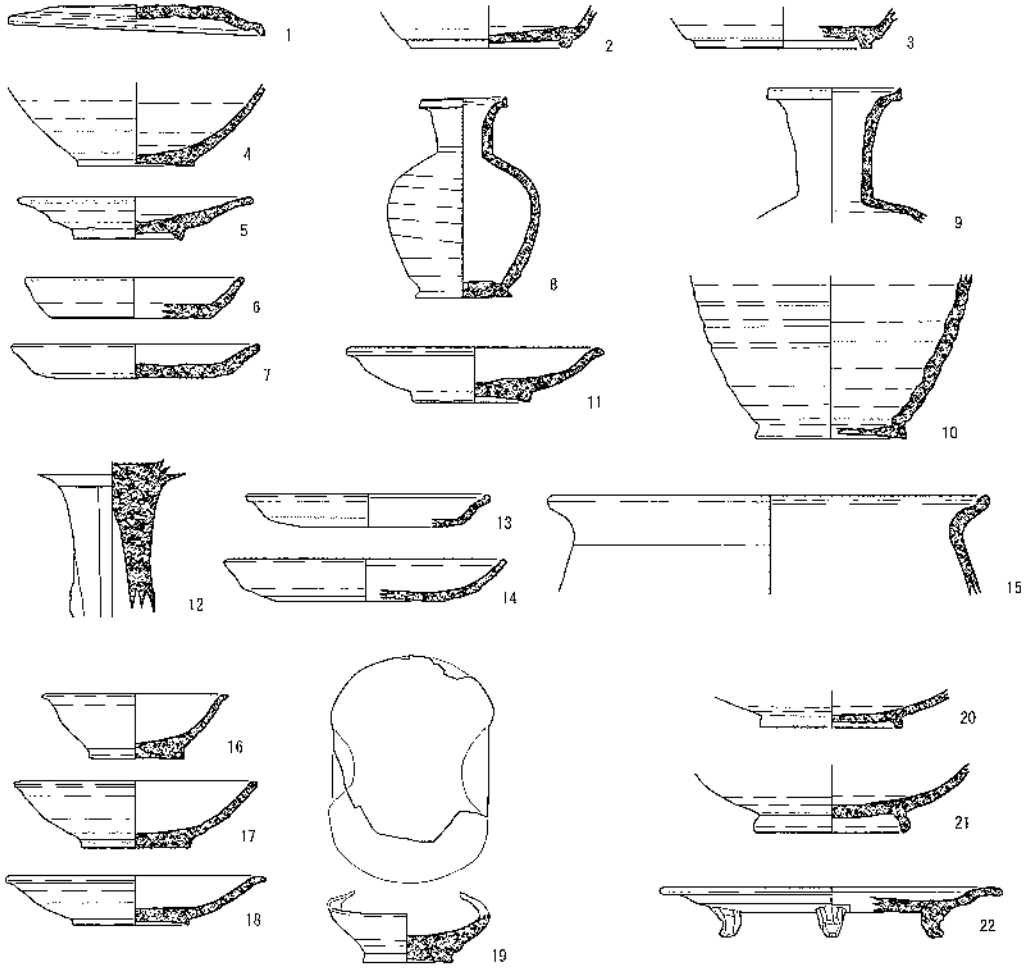
天神川古窯址群産須恵器の内、９世紀以降の分布圏についてみてみよう（図１）。

発掘調査事例の少ない湖西南部については明らかではないが、湖西中部から北部にかけて、広く分布していることが判る。中でも、湖西中部での出土状況は窯跡に近いこともあってか顕著である。

〔天神川流域における生産遺跡群の画期と仰木の開発〕

窯跡の位置を見ると、９世紀中頃を境に立地が大きく異なることが判る。９世紀前葉までの生産遺跡は、琵琶湖に面する段丘・丘陵上に位置している。一方、９世紀中葉以降はそこから隔たった仰木へと移動する。

仰木における考古学的調査は、十分であるとはいえないが、現時点での発掘調査および分布調査によると、９世紀中葉を遡る遺構・遺物は、縄文時代のものを除くと確認されていない。つまり、仰木においては９世紀中葉の生産遺跡を端緒に開発が進められていったことがうかがわれるの



第２図　延暦寺大講堂Ｔ１整地層

である。

5．おわりに―平安時代前期における延暦寺の開発―

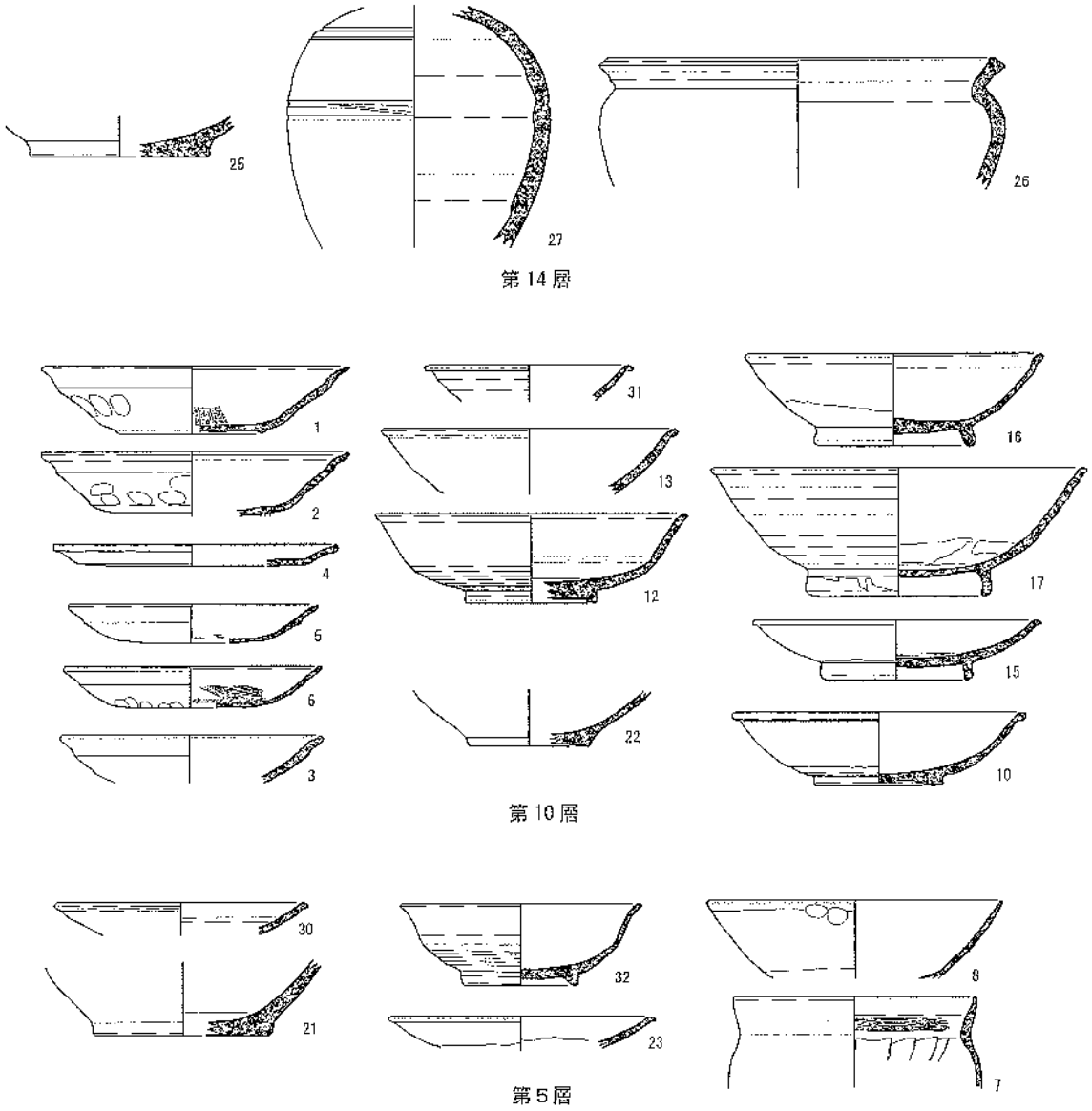
延暦寺の開発は、最澄の時点ではさほど大きなものではなく、中でも横川に関しては9世紀半ばに円仁が開いて以降ようやく堂舎が建ち並ぶようになったと考えられている。考古資料をみても、最澄によって開山された延暦寺の草創期である9世紀前葉までの遺構や遺物はほとんど確認されていないのが現状であり、当該期においては施設が面的に広がっていなかったことを示唆している。

また、9世紀代（中でも後半）の延暦寺から出土する土器群については、平安京的な様相ではなく、近江湖西地域で一般的にみられるものである。中でも須恵器については山麓に位置する仰木から供給されたものであることが明らかとなった。

天神川流域の生産遺跡群、ことに上流域の仰木におけるものは、年代からみると、延暦寺が開かれていく過程、また、延暦寺に供給された須恵器の在り方と軌を一にしている。それ以降の延暦寺と仰木の関わりを考えると、文献史料は残されてはいないものの、仰木の開発の契機は延暦寺とは無縁ではなかったといえるだろう。つまり、比叡山のみではなく、山麓の集落再編を含めた形で開発が進められていったといえるのである。

こういった在り方が、古代の山岳寺院の造営にあたっての一般的な様相であるか否かは比較対象を持たないことから、現時点ではこれ以上の議論を行うことは不可能である。ただ、9世紀半ば以降に鎮護国家の寺院として急激な変容を遂げた延暦寺ならではの在り方である可能性も否めない。今後の延暦寺関連遺跡の調査・研究に期待したい。

（はたなか　えいじ：企画調査課　主任）



第3図　居士林研修道場周辺

付記

京都大学教授鎌田元一先生が平成19年2月2日にご逝去されました。上仰木遺跡の調査中、現地にて延暦寺の開発過程、平安時代の山岳寺院のことなど、ご指導いただきました。

この場を借りて、ご厚情に対してお礼申し上げるとともに、冥福をお祈り申し上げます。

参考文献

・延暦寺『延暦寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年

・京都教育大学考古学研究会「Ⅱ　天神山古窯址群について」『史想』21　1988年

・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会「下仰木天神山遺跡」『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』2002年

・畑中英二「天神川流域における生産遺跡群の展開」『紀要』第19号　滋賀県文化財保護協会　2006年

・立命館大学文学部学芸員課程『滋賀県大津市仰木遺跡発掘調査概報Ⅰ（遺構編）』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第8冊　1999年

編集後記

本協会の紀要が今回で20号を迎えました。ようやく成人式を迎えたことになります。これを機会に装丁を一新しました。

今回の紀要の内容は、時代区分では縄文時代から中近世まで、また、遺跡や遺構の評価や再検討を含め、遺物や資料の比較研究から考察に至るまで多岐にわたっています。いずれの論文にも、地域の歴史や文化の成り立ちと変容を解明しようとする熱い学究心が根底にあると信じております。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

（編集担当　M. N.）

平成19年3月

紀　要　第20号

編集・発行　財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732−2
Tel. 077−548−9780（代）
http://www.shiga-bunkazai.jp/
E-mail:mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本　三星商事印刷株式会社